

# 史跡難波宮跡発掘調査(NW04-4次)現地説明会資料

平成17年3月13日(日)  
 大阪市教育委員会  
 財団法人 大阪市文化財協会

## はじめに

難波宮跡公園を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって、大きく分けて2時期の宮殿跡(前期・後期)が見つかっています。前期難波宮は建物が掘立柱で瓦を葺かず、全面に火災の跡があり、天武天皇の朱鳥元(686)年に火事があった難波宮と考えられています。それに対して後期難波宮は、聖武天皇の時代の天平16(744)年に一時首都ともなった難波宮で、礎石の上に柱を建てて瓦を葺いた建物であったと考えられています。前期・後期ともに建物配置は中軸線を挟んで左右対称となっており、2時期の宮殿跡がほぼ同じ場所に建てられていたことが大きな特徴です。

今回の調査は公園の北東部で行っています。ここは前期難波宮の朝堂院内部に当たります。朝堂院は官人達が集まっているいろいろな儀式や饗宴、政務などを行ったとされるところで、中央に広い庭があり、それを取り囲むようにして建物(朝堂)が建っています。その中で、東第一堂については1988・90年度の調査で遺構が確認されていますが、1990年度の調査で、東第一堂の北側約4mのところ、東西方向の柱列が見つかっています。柱穴はそれほど大きくないものの、正東西方向を向くことから、前期難波宮に関係するものである可能性が考えられましたが、どこまで続くのかなど、詳細は明らかになっていませんでした。よって今回の調査はこの柱列について行いました。

## 調査成果

### 古代の柱列1・2

1990年度の調査で見つかった柱列とつながる位置に、東西方向の柱列1を見つけました。見つけたのは11間分(約16m)です。柱穴は掘形の大きさが約0.8m×0.6m、柱痕跡が約0.15mで、90年度に見つかったものとほぼ同じです。両者を合わせると21間(約30m)となり、さらに西側に続くことが判明しました。さらに今回の調査では、その柱列1に重なって、ほぼ同じ場所でそれに先行する柱列2を見つけました。柱穴の大きさなど、その特徴は柱列1とほぼ同じです。両者ともに正方位を向くことから前期難波宮に関係するものと考えられ、柱が比較的細いことから、壁や厚板を用いた塀ではなく、より簡単で仮設的なものであった可能性が考えられます。

## まとめ

今回の調査では東西方向の柱列が続くこと、それが建て替えられていることが分かりました。今回建て替えの跡が見つかったことで、1990年度の調査で見つかった柱列にも、同じように建て替えがあった可能性が考えられます。

また、柱列1・2を西に延長した部分では、1970年度の後期大極殿の調査で、同じような柱列が見つかることに気が付きます。この柱列は大極殿の東と西で別れて見つかり、その間はずながりません。今回の柱列1・2はこの東側のものにつながることになり、総延長

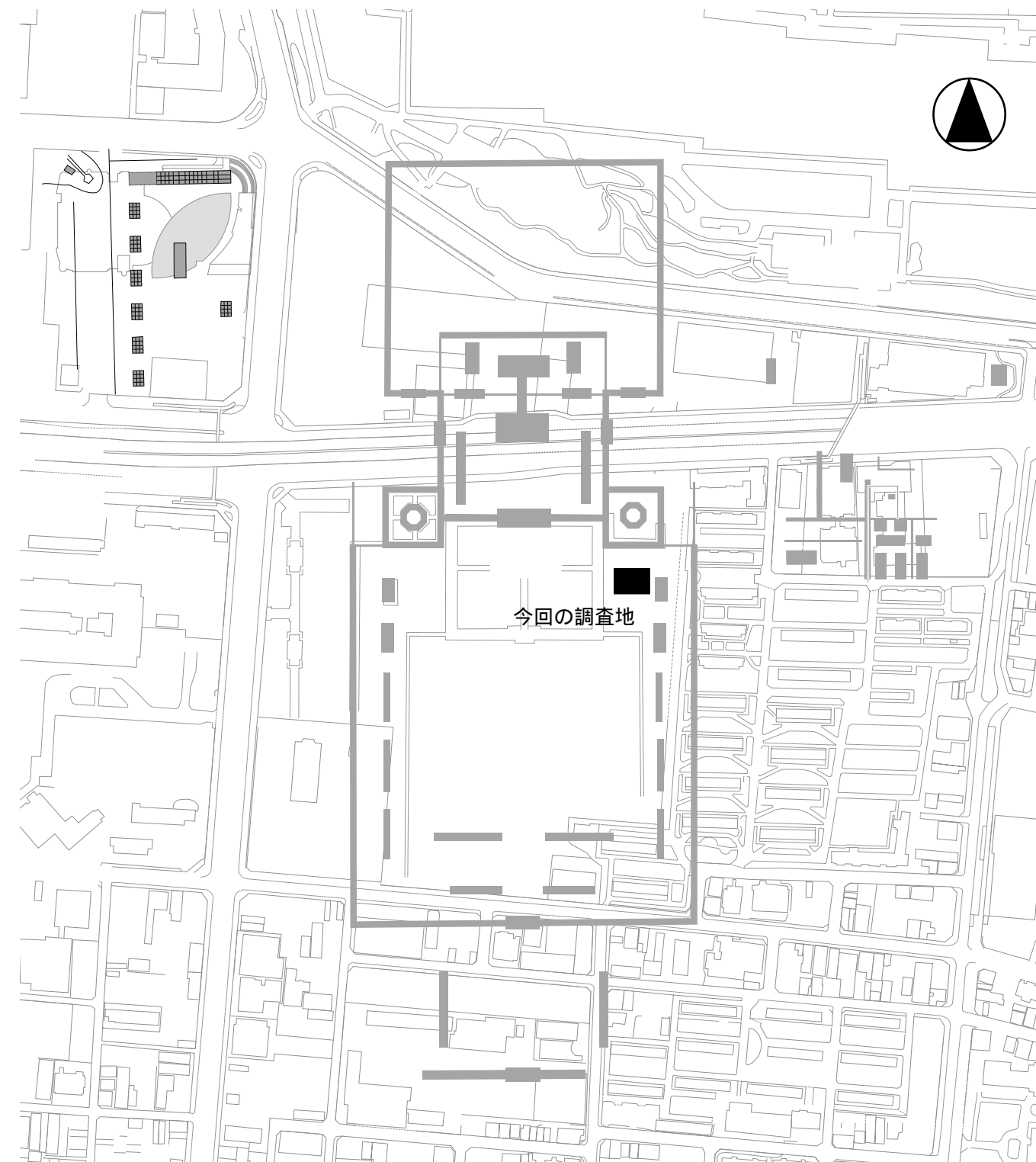


図1 調査地位置図

は約90mにも上ります。ちなみに大極殿の調査で見つかった柱列の、あいだの開いているところはちょうど前期内裏南門の正面となります。もしこの柱列1・2が中軸線を挟んで左右対称にあったのなら、中心の南門が見えるところだけ開けておいて、両側は閉ざしたものだったのでしょうか。日本書紀などをみると、難波宮の朝廷ではさまざまな行事が行われたことがうかがえます。今回見つかった柱列が、その中のどれかに関係する可能性は十分考えられますが、いずれにしても、西側ではまだ見つかっておらず、今後の調査成果を待って、さらに検討したいと思います。



図2 難波宮公園と調査区を南から望む

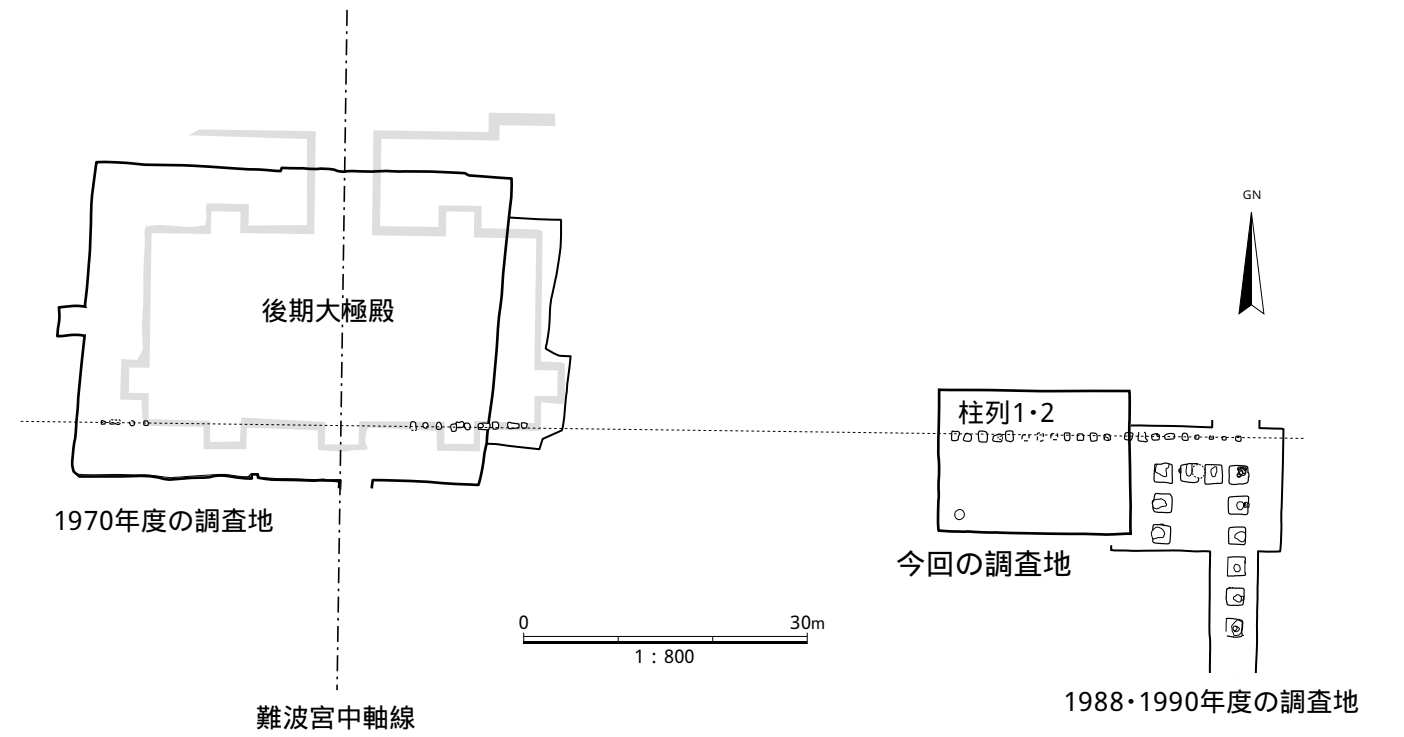


図4 今回の調査区と過去の調査区との関係

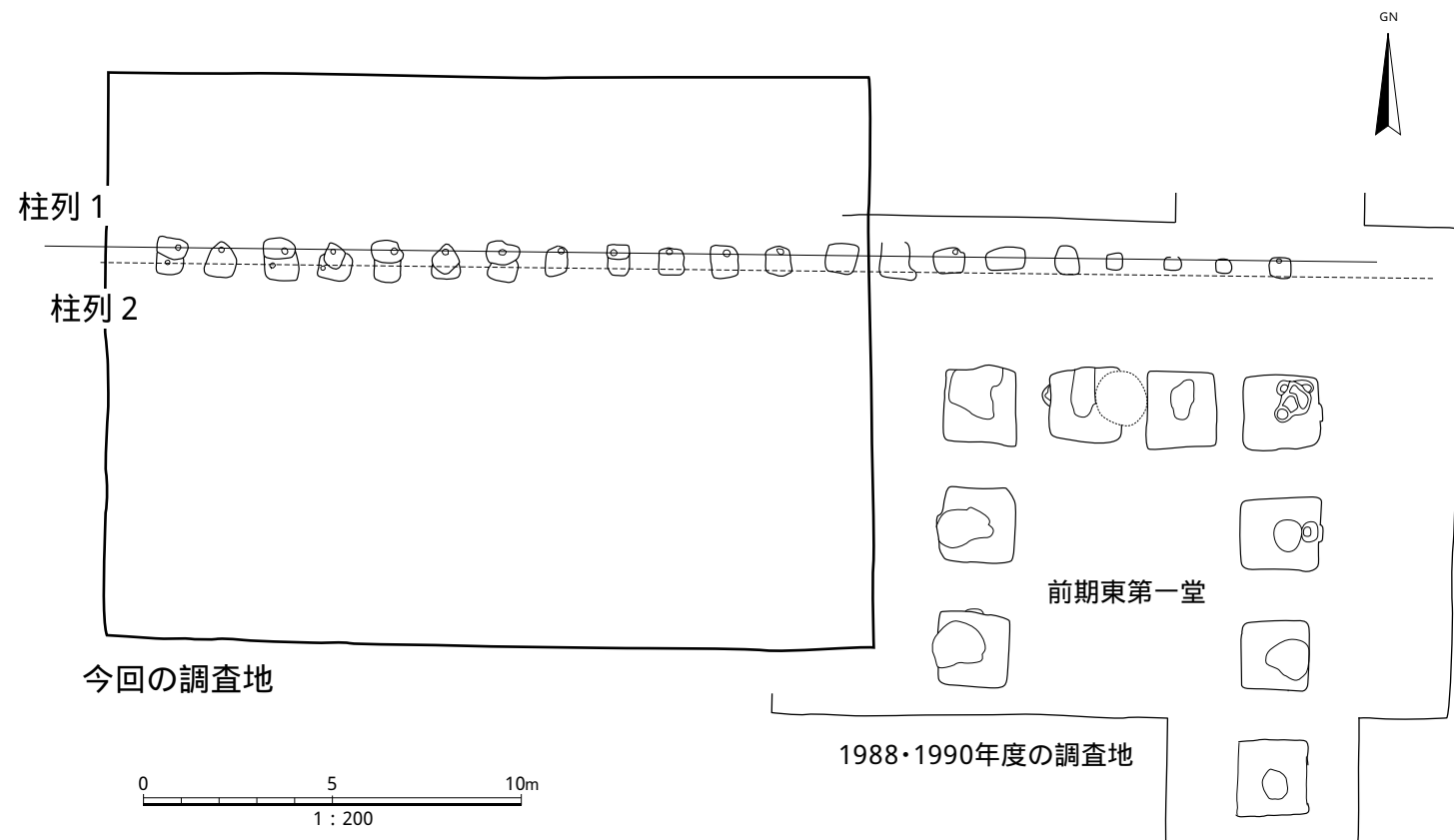


図3 今回の調査区における遺構配置図

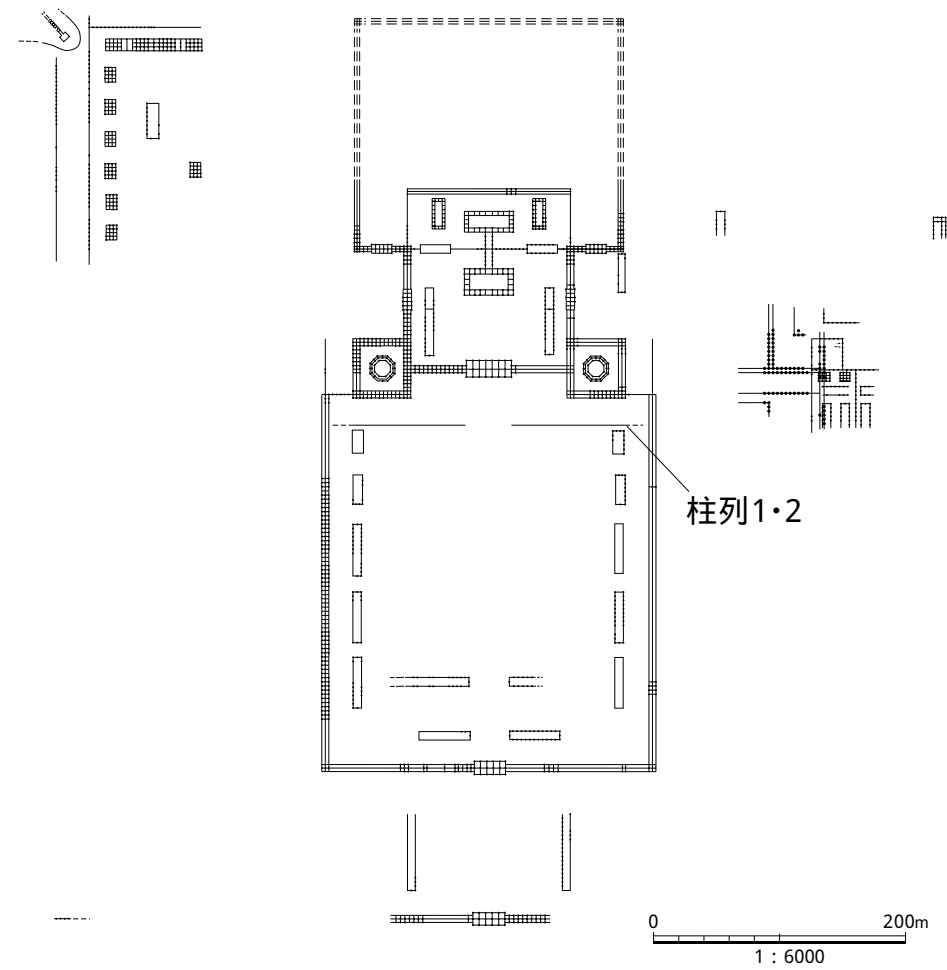


図5 前期難波宮における今回の柱列の位置